

---

# -永久物語-

†ユウ†

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

- 永久物語 -

### 【Nコード】

N8817X

### 【作者名】

十ユウ十

### 【あらすじ】

完全一次小説ですm(´`´´´)m  
ファイル等と旅に出てみませんか？

## 我が子超伝説

永久物語……………

我が子伝説解禁…

主人公 龍族の小さな少年フェイル

偉大なる龍族の少年レイヴィル

大魔王神と成り果てたネクスス

墮天上女神かつ天空の勇者ユレン

他 様々なキャラが織り成す

永久？に紡がれる物語である

BLちつくな部分あります

ちなみに

フェイル×ネクススくらい

まあ手繋いだりとかくらい

てかまだ自分の中のBLはあります…

出しているか悩み事です…にゃーWWW

物語としては1話完結で

ユルユル行きたいと思えます

人物紹介は後ほど…  
キャラがかなり居るので  
簡単にしか書きません^^;;  
詳しい紹介が見たい場合  
個別にコメント頂けましたら  
載せていきます

ゆっくり更新です  
暇つぶしくらいには  
なるかと思えます

もしかしたら  
見たことがある方も居るかもですが  
こちらは完全 一次しかありません

十ユウ十

## 第1話 偉大なる龍族の双子

僕達は龍族…

僕達は偉大なる龍族

龍族の末裔なんだ

でも 僕は龍になれないんだ  
何でだろう？

なにかの罪なのだろうか？

だけど弟は龍になれる  
きつと両親も龍になれる

でも僕は龍になれないんだ

理由は何か考えた…でも分からない  
僕には分からない…だって難しいから  
だって……分からないよ

僕には力が足りないの？弱い？ダメ？

今思えば僕は焦っていたのかもしれない

「兄さんどうしたんだ兄さん…」

「レイヴィル………?」

レイヴィルと呼ばれた赤髪の少年  
起き上がるのは

兄さんと呼ばれた茶髪の少年

ちなみに茶髪の少年の名はフェイル

「かなり魔されていた…よ…

冷や汗もかいている…

どうしたんだ……兄さん」

レイヴィルはフェイルを抱き締める

見た感じレイヴィルが兄に見える

理由は簡単なのだ

フェイルはとも小さい背が低いのだが

弟のレイヴィルはかなり高い

軽々とフェイルを腕に収め

レイヴィルは抱き締める

「苦しいよレイヴィル…」

苦笑しながらフェイルも

レイヴィルの背に手を回す

本当に双子なのか…

戸惑うほどに似ていない

兄フェイルは身長が低く

見た目も顔付きも体格も

華奢で女の子らしい

弟レイヴィルは背は異常な程高く

見た目も顔付きも体格も  
男らしくしつかりしている

髪の色も目の色も違う

フェイルは茶髪に銀目

レイヴィルは赤髪に金目

2人は疑うほどに違うのだ  
そして……………

「兄さん………… 1人で悩むなよ  
僕が居るだろ…？」

父さんも母さんも居ない今  
僕にとっては兄さんだけが  
僕の唯一の存在なんだ」

「僕だつてレイヴィルが大切だよ  
もちろん僕の唯一の存在だよ」

弟レイヴィルは言うまでもなく  
かなりのブラコンである  
フェイルは少々ブラコンだが  
べつたりするほどではない  
本当に大切に思つて居る  
いつも側に居たいと感じている

でも急にそんな日々が無くなつたら？

次の日レイヴィルの姿は

家の中に無かった  
魔力の痕跡だけが  
ただただ転々と残っていただけ

「レイヴイル…？」

フェイルは呼び掛ける  
レイヴイルの魔力の反応も  
その気配も無いことを  
フェイルは知っている  
知っているけど希望を無くしたくなかった

「あはは……おつかしーな…  
何でだる僕お兄ちゃんなのに…  
何で………こんなの無いよー!!」

レイヴイルが残した  
ペンダントを手に握り締め  
フェイルは力無く座り込む  
何時間経ったのだろうか…  
フェイルは動けないままで居る…

「フェイル!!!無事か!!!」

フェイルがハツとしたのは  
1つの声が響いたからだ

「ネクスス…」

フェイルは無意識に呟く



泣きながら見上げた先には  
金髪の背の高い少年  
名をネクサスと言う

「よく聞け……お前は…助かったんだ…  
ジライクスの作り上げた  
この一族の集落には  
既に人が1人も居ない…！  
お前だけが助かったんだ！」

「何………？訳が分からないよ…  
僕が生き残り…？僕達の一族が無い…？  
何があつたの！？ジライクスって！  
なんでレイヴィルは居ないの！？」

フェイルが混乱しながら聞く  
ネクサスは1つ息を吐き出し  
フェイルをジッと見つめる

「よく聞けよ………  
お前はダークライシスと  
クローク一族の生き残りだ…  
誰が襲つたかは分からない  
ただレイヴィルは生きている…  
ジライクスも生きている…  
他の者は分からないが…  
気配はまだある…」

「つまり………僕は1人…」

フェイルは現実を聞いては  
瞳から光を失っていく…  
ネクサスはフェイルの肩を掴み  
軽く揺すっては見据える

「大丈夫だ…お前は1人じゃない…  
オレが居てやるから…そばに…」

「う…う…う…ネクサス…ネクサス  
僕は1人はイヤだよ…もうイヤだよ…」

「もうあの時のように…  
お前を1人にはしねえよ…」

ネクサスと言う  
フェイルは子供みたく泣きじゃくっては  
ネクサスにしがみつく  
軽くて華奢なフェイルを  
ネクサスは優しく抱き止める  
見た感じはまさしく  
年齢の離れた兄弟のよう…  
だが実はこの2人幼なじみの親友なのだ

「あり……がと…う…  
ありがとう……ネクサス」

「礼なんか要らねーよ…  
お前だけでも生きていてよかった  
オレは素直にそう思う」

この後フェイルが泣きつかれて  
眠りに付くまで

ネクサスは側に居てやる……

ネクサスが異変に気づいたのは  
フェイルが眠りに付いてから

ものの一時間後ぐらい

大勢の何かに囲まれている

ネクサスは小さくぼやき

フェイルをベッドに乗せては

1人で行こうとするが

はしっ！！とフェイルに手を掴まれる

「……………僕……………も行く……………」

嫌な予感がするんだ……………この気配……………」

ネクサスはフェイルの目を見やる

覚悟を決めた力強い目だ

「……………来い……………」

ネクサスはそれだけ呟き

立ち上がったては部屋を出る

龍の双子が引き裂かれた……………」

片翼の龍は……………飛べるのか……………」

## 第2話 残酷な運命

「来い……………」

ネクサスが呟きフェイルは付いていくでもそれが現実を突き付けられるそんな事態になるとは…この時フェイルは思っても居なかった

「やはりな」

ネクサスはピタリ止まり目の前の人物を睨み付ける

「やあネクサス兄さん…」

「ネアス……………」

「そんな……………!!」

フェイルがネアスに近付こうとしネクサスはフェイルを制止する

「今の彼奴”はオレ等の知るネアスじゃない……………気を許すな…戦いになったら殺す気でいけ…」

「流石兄さんだよ……………」  
「実の弟であつても気は許さない…  
それに戦いになつたら殺す気ねえ」

ネクサスがネアスの言葉に歯軋りする  
言いたい事 伝えたい事  
皆 噛むように消して  
ネクサスはネアスを睨む

「我が弟よ……………いや……………」ネアス……………」

「なんだい……………兄さん？」

「その……………腕は……………なんだ……………」

ネアスが明るみに出た直後  
ネクサスの表情は固まる  
ネアスの見た目はネクサスとほぼ同じだ  
金髪に鋭い目つき…  
唯一違うと言うならば  
瞳の色くらい……………服装……………」

ネクサスは透き通るくらい綺麗な  
青く煌めく綺麗な瞳だ…  
ネアスは違う……………どんな薔薇よりも  
血の流れより透き通る……………赤だ

だが今はもっと違う……………」

ネアスの片腕は…人間のモノではない  
異形の怪物の………兎に角  
この世に存在し得ない……腕だ  
包帯が巻かれ……血に塗れ…  
先からは刃物のようなモノがはえている  
一枚の鋭い刃………

「ネアス!!!!!!」

「ネアス!?!」

「ああ……この腕かい？」

「この腕はねえ…オレの…自慢の腕だよ」

「な……!?!?!」

「フェイルに切れ味見せてあげるよ!

兄さんの身体を引き裂いてねえ!」

ネクサスはネアスの言葉に混乱しては  
ネアスを睨み付け空間から…アスラル…  
アストラルセイバーを出現させる

「ネクサス……あの子は…一体」

「オレの弟ネアスだ………」

「……あの子がネアス君…  
ネクサス…気を付けるんだ  
……後ろに誰か付いている」

「構わねー……行くぞアスラル！  
フェイル！！お前はサポートを！」

「もちろん！！」

「分かったよ！全力補佐に回る！  
気を付けてネクサス！！！」

ネクサスがネアスに突っ込む  
またネアスもネクサスに突っ込む  
フェイルがすかさずネクサスに  
防御上昇魔法と攻撃上昇魔法を放つ

ネクサスが優位に立つ戦い……  
フェイルもまた勝利を確信する……  
だが………戦況は傾く

ネアスの腕の一振りが  
ネクサスの血を…ネアスの血を  
浴びる毎に強くなっているのだ

「兄さん！！兄さんの強さは  
こんな物なのか?!?!?  
オレが憧れた兄さんの力は  
たったコレだけだったのか!?!」

「ぐ………お前…一体…一体何が!!」

「力が溢れるんだ!!!!!!」

力が！！！！兄さん！兄さんには  
一生分からないだろうな！！  
”あのお方”に共に作られたけど…  
兄さんは何不自由なく気ままに生き…  
オレは力だけを求められ…！！  
身勝手に捨てられた！」

「……………ネアス…！！！！  
それは違う！」あのお方”は  
お前の為に……………！！」

ネクサスが言った瞬間  
ネアスから光の力……………  
いや……………光のような闇の力が溢れる

「え……………え……………なん……………」

ネアス自身も自分の力に  
動揺を隠しきれないのか  
自分の溢れる力を操作しきれず  
暴走しかかる……………

ネクサスがネアスに手を伸ばすが  
それも遅く……………  
ネアスの姿はまるで別人のように…  
なり果てていた……………

紫を貴重とした仮面に…  
青いジャケットのような物に  
肩当てが付き首には



金色に輝く宝玉が付いている…

左手は青く鋭い獣爪みたくなり

右腕の刃は刃数を増やし

赤く怪しく光る……………

髪型こそ…ネアスの名残はあるが…

殺害を楽しむように

見える口元は笑みを浮かべ

鋭い刃と爪が鈍く光る

あからさまに…………ネアスではない…

「ネクサス…気を付けるんだ

今のネアス君は…………危険過ぎる！」

「は…………？一体何が起きたんだよ！」

「ネアス君に取り巻く闇…

ネアス君自身が持たない

深い闇が…………元有る光の力を

狂わせて…………本来存在しない姿に…………！」

「そんなあ…！」

ねえっアスラル！どうにかならないの」

「…………僕のカじゃ……………そうだフェイル

…アーティを呼んでくれるかい」

アストラルセイバーが輝き

剣は人の形に成り果てる

「今呼ぶよ……………」

フェイルもネクサスと同じように  
空間から剣ではなく扇…………

アーティクトファンを呼び出す

「久しぶりアーティ!!!」

「あつ!久しぶりフェイル!

あたしを呼んだのは…………アスラルね」

「ああ…アーティ…………ネアス君を…」

「なるほどね……………」

ネクサス…フェイル時間稼ぎなさい

あたし達で力を強制封印するから!」

アスラルとアーティは

互いに魔法陣を描きながら

フェイルとネクサスに言う

「頼んだぞ!」

「頑張るよ!!!」

2人は勢い良くソード武器を持ってば

ネアスの注意を自分達に引く

でもそれが悲劇だった…

ネアスが腕を振り下ろす……

「え　　？」

フェイルがハツとする……

ネクサスが目を疑う……

振り下ろされた先にはフェイルが居た

ザシヤアアアアツ　！！！！！！

切り裂く音と飛び散るのは赤…赤　赤　赤

地面や周りにあるもの……

頬や服……生暖かい物が……

ベツタリと付着する……

倒れて居たのは……フェイルじゃない

……ネクサスだった……

## + キャラ紹介 \*

簡単なキャラ紹介です

キャラ個人個人の詳細が欲しい場合  
リクエストと言う形で

コメントをいただけたらと思います  
人数居ますので……

最後まで見ていただけたら感激です

主人公 / 龍族

フェイル // ダークライシス // クローク

ダークライシス一族と

クローク一族と呼ばれる

誇り高き龍族の少年だが

現在は龍にはなれない

元気で明るく優しく何より他人思い

魔王族かつ闇の一族のネクサスが

とても大好きで一番大切に思ってる

弟のレイヴェルとはいつも一緒に

ブラコン過ぎる程ベタベタしてる

色々な人に女みたいと可愛がられてる

好かれやすい体質らしく

とにかく色々な人に好かれてしまう

特に男から好かれやすいらしい

めっちゃ背の低い少年で茶髪銀目  
実はとんでもない秘密を抱えてるが  
まだ当の本人も気付いていない  
武器は基本は7秘法武器 扇  
ソード武器は槍  
とある武器で人格が変わったりする  
誰かが傷つくのと…血が大の苦手である

## 魔王族

ネクサスⅡノア

大魔王神が自らの力を抑えるために  
作り上げた魔王神

その力は大魔王神すら越えると言う噂

ノアと言う名前は大魔王神が

ネクサスに与えた名前

大魔王神を尊敬している

ネアスと言う弟が居る

戦闘相性はいいのだが仲は険悪

幼馴染みのフェイルが気になり仕方がない

特に幼い頃から共に遊んでたりしたため

とても？仲良しでフェイルに好かれてる

ただ本人はBLなんかじゃない！

と豪語していたりする

正義感が強く仲間思いで

ツンデレだけど本当は優しい

クールかつ冷静沈着を演じる

まだ力は今は開花していない

武器は7秘法武器 剣

ソード武器も剣 もしくは素手  
魔法は全く使えないが技量がよく  
特技や見切りに長けている  
フェイルと組むと最強タッグ

龍族

レイヴィルⅡダークライシスⅡクローク

フェイルの双子の弟で

フェイルと違い龍に変わる

司る力は”オーロラ”の力

自分より何より兄 フェイルが大事

とにかく大事過ぎて異常な愛を捧げてる

ブラコンを遥かに通り越している

「兄さんは僕のモノ！」が口癖

兄さん以外は愛せないとか良くボヤク

ネクスとネアスを

勝手にライバルと勘違いしている

フェイルとは片割れの強さを持つが

剣と杖以外の腕はカラツキしである

また魔法の力に長けてる為

打撃には弱いし攻撃も微妙

魔法攻撃に対しては最強過ぎて

右に出る者は居ないと噂されている

好奇心旺盛で無自覚キザ&amp;ナルシスト

いざという時は頼れる子で兄貴分な子

裏切り行為が大嫌いでいつも真っ直ぐ

武器は7秘法武器 杖

ソード武器は 剣

やられる前にやっちまえタイプ

魔王族

ネアスⅡレア

ネクサスの実の弟

同じく大魔王神が力を抑えるために  
ネアスを作り出したが………

大魔王神はネアスに力と覚醒を求め  
扱えもしないような

膨大な闇の力を植え込み  
暴走させ楽しんでいる

また大魔王神の本性を知ってるから  
大魔王神が大嫌いである

本当の本当はネクサスが好きだが  
大魔王神の味方するネクサスも大嫌い

レア と名前が違うのは  
大魔王神がネアスに与えた別名なだけ

ネクサスと違い魔法を駆使し戦う  
ネアスは鎌を中心に扱う

サード武器は大剣

世界創始者

ユウⅡクローズⅡディオⅡリヴァイヴァル

別名「世界の始まり」

世界創始者であり生きとし生ける者

また世界が生み出した

全ての血と技と武具と魔法等を  
会得している最強人物である  
その全ては謎に包まれており  
彼女の全てを知る者は居ない  
ただ地上ほとんどの人物  
また自分が生み出した神にさえ  
嫌われていたりする…  
フェイル等…他とは仲良し  
ティータイムが大好きで  
よくパーティーを開く…現在の神では  
天空帝に住まう神と唯一仲良し  
現在天空帝に暮らしている  
自分を僕と自称しており名乗る際は  
天帝神12守護神No.0のユウと言う  
中心で扱う武器は鎌  
サード武器は三節棍  
この永久物語では最強人物

他…

ユレン「スカイグレー」

天空帝の第一王女様

非常に女王様タイプで上から目線

父である天帝神が大好き

サーヴィア「スカイグレー」

天空帝の第二王女様でユレンの妹

非常に臆病かつ怖がりだが心優しい

同じく父である天帝神が大好き



ローヴィア⇨スカイグレー  
サーヴィアの中に居た人格者だが  
サーヴィアの願い ユウの力により  
以降双子の姉としてサーヴィアの守護者になりかわる  
王位の座や天空帝には興味が無い

ナギ⇨ゼセルト⇨クローク  
ゼセルト大財閥の一人息子かつ  
クローク一族の生き残り  
クローク一族に生まれるも  
人間界に捨てられ人間界に居た  
子に恵まれない夫婦のゼセルト婦人が  
ナギを助けて息子にした  
フェイルとは仲良し  
幼なじみが4人ナギを追って  
人間界に降りたとクローク一族から  
言われていたりする

イージス⇨サン⇨セレシャル  
サン姉妹の末っ子で  
星を扱う星の女神様  
古代恐竜を操る力を本来持つ

シルフィア⇨レジエスト⇨グレア  
妖精とエルフのハーフかつ王女様  
非常にフワフワしており不思議ちゃん  
世界のどこかにそびえ立つ神木と  
命が繋がっているとされている

キシ⇨サルヴァーハ

レーヴェ＝サルヴァーハ

とりあえず見た目もそっくりな双子

キシは緋炎の英雄と呼ばれる

レーヴェは赤炎の騎士と呼ばれる

キシは金髪に金目のショートヘアで

レーヴェは赤髪に赤目にした感じ

キシ レーヴェ共に互いをライバル視してる

キシはさすらいの守人をしているが

レーヴェはとある城の騎士をしている

2人ともかなり腕が立つ

異端の大天使一家

長男 ファルガイア

次男 アレックス

三男 ショウ

末男 リユウガ

元は1人の異端者だったが

とある事のせいで

力と身体を4つに分けられてしまった

非常に兄弟内の絆が固い

大災害により兄弟離れ離れになった

ファルガイアとアレックスは天空帝に居て

ユウや天帝神の補佐をしている

アルガルト家

長男 ヴォルト

次男 ゼクス

三男 テイリア

四男 アゼル

五男 ヒリュウ

六男 セシエル

末男 サヴァイ

の七兄弟で”アルゼルト”と”ゼイジエル”

2人の力を受け継ぐ

人造の魔導士兄弟である

個人個人に特殊技能と呼ばれる者と

各々の属性に見合った対なる竜が居る

見た目や雰囲気から何まで

人間と全く同じであるが

感情の一部が皆抜けている

互いに離れ離れに暮らしている為

兄弟全員が集まることはなかなか無いが

長男ヴォルトにだけ埋め込まれた

”兄弟危機察知能力”により

兄弟が危機に陥るとヴォルトは

颯爽と現れて助けにはいる

後々明かしていく事になるが

ゼクスとフェイルはとある関係

ちなみにアゼルは世界的に認められた

研究者でもある…が…やや変人

セシエル サヴァイのみ名前が違う

セシエル(サヴァイ)〓ガザルト〓エクセリオンと言っ

裏展開の黒女神

ジル〓ヘルナイト〓プリンセス

裏の女神で美しき容姿を持った女神

ちよつとだけ高飛車

裏から世界を見守るのが役目だが…

7 秘法武器の作成主

扱うのは大剣

表展開の白女神

エリス⇨セイナイト⇨プリンセス

表の女神で控えめで臆病な性格だが

見た目や性格とは裏腹に意外と格闘派

表から世界を見守るのが役目

裏7秘法武器の作成主

扱うのは大弓

現在は以上と言う形

また追加があれば追加したり

更新していきます

### 第3話 強いのは…

「…………え…………あ…………」

「なっ……………！！ネクサス！」

フェイルが固まる…アスラルも固まる…  
アーティは気を失う…予想外なのか否か  
ネアスの動きも鈍る…静寂が訪れる…  
ガタガタと震えフェイルが崩れる  
足下のネクサスを抱き寄せるが  
血に怯え始める…もちろん隙だらけだ  
だがネアスもまた動けずにいた

「兄さん……………兄さん兄さん兄さん」

「誰の……………声……………！！？」

「気を抜かないで下さい！」

アスラルはフェイルとネクサスの前に立ち  
警戒を怠らず辺りを見渡す  
ネクサスに治癒魔法を必死でかけながら  
フェイルは突如聞こえた声に耳を傾ける

「オレが……………！！？！！？オレが……………！！！！！！」

「ネアス!?!」

「ネアス君……………」

声の主が分かる…間違えるはずがない  
ネクサスに似ていて  
ちよつと子供っぽい声……  
ネアスの声だと気付くのに  
そう時間は掛からなかった

目の前のネアスは  
手をダラリと下げて力無く立つだけ  
まるで魂が抜け落ちたかのように  
ネクサスの治癒を終えてから  
フェイルは自分の頬を一度二度叩いて  
自分をはつきりさせる

「ネアス……………!?!」

「フェイル!!」

ネアスに向かうフェイルに  
アスラルは声を掛けるが  
フェイルは無視する

「フェイル……………寄らないで……!!  
寄らないで……!!……!!」

「な……………なん……………」

そこでネアスの声は消え去る  
疑問を抱いたままフェイルは  
ネアスに近寄る……  
依然としてネアスは動かない…  
また後方に居るネクスアもまだ  
目を覚ましては居ない……

「……………」

自分なんかより  
ずっとずっと大きなネアスにしがみつく  
ピクリとネアスが身を揺らす

「…戻って…戻ってよ……」

フェイルは泣きながらネアスに言う  
ネアスの手が…左手がピクリと動く  
涙の粒がその手に落ちる……  
それが輝き始め  
フェイルは眩しさに目を閉じる…

一瞬 一瞬だけ 何かを感じた  
暖かいもの……溢れそうなほどの  
優しさが満ち溢れて それに包まれて  
目を閉じてみる……  
感じるのは闇じゃない…強い光……

「…ごめ……フェイル…兄さん…」





レイヴィルを浚ったんだ……………」

「……………ッ……………！」

「父さんは器を探していた……………」

次の魔族の王に相応しい人を……………」

ずっと……………兄さんは駄目だった……………」

理由は簡単だ……………優しい心を持った……………」

そして何より……………」

父さんは兄さんが好きだったから……………」

オレは弱かった……………力と覚醒を……………」

求められたが今のよう……………」

……………力の安定さ……………神の器……………」

父さんは……………レイヴィルに目を付けた……………」

「そうだったのか……………」

『!?!?』

「……………ネアス……………お前がオレと……………」

距離を置き嫌っていた理由は……………」

そう言う所からだったのか……………」

……………気付かなくて悪かった……………」

「に……………いさ……………」

ネアスが更に涙ぐむ……………」

プライドも何も捨て去って……………」

ネクサスにしがみつくとネクサスもまた……………」

ネアスを強く抱き締めてやる……………」

フェイルは2人を笑顔で見守る……

……それから……低い声が響き渡る

- ……愚か者が……ネアス…… -

「……ひ……っ……！」

「誰!?!」

「父さん………」

ネアスが身を縮こませ

ネクサスが庇うように立ち

辺りを睨み付ける

- ネアスの言葉を信じるのかネクサス -

「ネアスは……オレの大切な弟だ！  
信じるさ……信じてやるさ！」

- この私を裏切るのか…… -

「ネ……ネクサスのお父さん  
なんでネアスを信じる事が  
お父さんを裏切る事になるの……？」

フェイルは持っていた疑問をぶつける  
ネクサスもネアスもハツとする  
声が止まる……

「父さん………本当は父さん……」

ネクサスが睨み付け言い始め  
一気に闇が濃くなる

- 黙れ…黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ！ -

雷が進る…一直線にネクサスに向かう  
ネアスはいち早く気付き  
鎌を空に掲げる…手を離すのが…  
一瞬だけ遅れる…鎌は避雷針になる…  
それは………

「………つく……！」

「う……ぐ……ああああああ……！」

「ネアス………！！！！！！！！！！」

フェイルとネクサスの声が重なる  
ドサツとネアスが倒れ込む  
笑い声だけが響き渡る

- ふふっ………くはははははっ

私から見れば貴様等所詮赤子程度だ  
ネクサスよ何も知らず

私と居れば幸せだったと言っのにな -

「貴様………！！！！それでも

オレ等の父さんなのか！？」

・仕方無く生み出した玩具よ……ふふっ

「……………っ……！アスラル……！……ッ……！」

ネクサスがアスラルを剣に戻して  
空間を睨み付ける

剣を構える……… 馴染みの構えだ……

フェイルはネクサスの強さを

誰より何より知っていた

だから少し安心していた………

「出て来いッ……！……来い……！……！……！」

・ふははははははは……！！……！！……！！

ならば私の城へ帰って来るがよい……

……… それから……… 龍族………

貴様の弟を取り戻そうなど考えるなよ

考えるだけ無駄だ………

あの者……… いや……… 王子は………

最早貴様の事など記憶には無い

「……… え……… レイヴイル………」

声も気配も消え去る………

ネクサスは負傷したネアスを抱え

フェイルはただ……… 呆然と………

虚空を眺めて居た

………

#### 第4話 消えない絆 消えた糸

大魔王神に言われた事

レイヴィルの事

王子って何……忘れてる……？

分からないよ 分からない

何で 何で 何で 何で

「フェイル……フェイル!!」

「……っあ……!」

「大丈夫か……」

ネクサスがネアスを担ぎながら  
フェイルの頭に手を乗せてやる

「レイヴィル……が……レイヴィルが」

「……」

フェイルが泣き出す

ネクサスはただ黙り込むしか無く  
時間だけが過ぎ去る……

「泣いても……仕方ないよね

僕の家行こう？

ネアスの治癒も…しなきゃだしね！」

フェイルは涙を拭いて

無理矢理笑顔を浮かべる

必死に言葉を探して並べる

自分の状況より最優先すべきだと

思ったものがあつたから

弟は生きていた…

記憶はどうだか分からないが

レイヴィルは生きている………

それだけで安心出来た…

フェイルは自分の家に向かい

ネクサスはネアスをベッドに横たわらせる

フェイルは集中を始めて

懸命に治癒魔法を掛けていく

見る内にネアスの傷は無くなり

あとは意識回復を待つのみとなる

「オレは最低だ………」

ネアスの手を握り締めながら

ネクサスは呟く

フェイルはネクサスの肩にしがみつく

「ネクサスは最低じゃない

最低なんかじゃ無いよ

僕が保証するもん……！」

「……………つ…フェイル！」

いつもの凜としたネクサスと違い  
今は弱々しくて

とても守りたいほどに

その手が…その瞳が小さく見える…

「に……………いさ……………」

ネアスがネクサスの手を握り返す  
弱々しいけど強く 強く握り返す  
ネクサスが笑みを浮かべる

「ネアス……………ゆっくり…今は……………」

「兄さんは……………ずっと…ずっと

オレの憧れの兄さんだよ……………」

だから……………だから……………」

自分を最低だなんて言わないで……………」

ゆっくりとゆっくりと

ネアスが言葉を紡いでいく

ネクサスがハツとする

「……………ネアス…悪かった本当に……………」

ネクサスの言葉を聞いたのか否か

再びネアスは規則正しい呼吸をしながら

眠りへと落ち始める

その間フェイルは考えて居た  
安心出来る発言があつたとはいえ  
弟は……レイヴィルは  
自分を忘れきつているかもしれないから

忘れて……しまっている  
考えるだけで何かが痛む  
痛い 痛い 痛い 痛い 痛い……  
レイヴィルには王の…神の器があつた？  
聞いたことが無い単語  
王の 神の器って何？  
どうして どうして レイヴィルなの？  
自分とレイヴィルは同じのはずだ

一緒に生まれて 一緒に生きて  
一緒に育つた……  
でも……両親は知らない  
もしかして自分とレイヴィルは  
兄弟ですら無い？  
血すら繋がってない??

よく考えてみる  
自分は龍族って言っているが  
龍になんかなれやしない  
そんな気配も無い  
でもレイヴィルは違う 違った  
龍にだってなれた  
それに龍の力だつて持っている



もしかして兄弟じゃない？

龍族の誰かが兄弟として育てた…？

そうとしか浮かばない

自分とレイヴイルには

見た目にだって差が有りすぎる

自分は背も低くて貧弱で…

髪は茶髪だし瞳は銀だ…

レイヴイルは自分なんかより

いや一族の皆を抜いて背が高い

いや一族は皆背が高いんだけどね

そして気になるのは髪の色や瞳の色だ…

レイヴイルは赤髪で金目

違い過ぎやしないか？

ずっと疑問に感じていた

自分はレイヴイルが大好きだし

レイヴイルもそう言ってくれてる

その気持ちに嘘なんか無い

絶対に嘘なんか無い

でも …

考えはパツと途切れる

肩に手を置かれたから

暖かな手 懸命な表情…

一気に引き戻される

「フェイル…！大丈夫か！フェイル」

「……………ネクサス……」

「声……掛けても返事ねえから……  
少しだけ焦った……………」

「……………あ……………ごめん……ね」

「レイヴィルの事か？」

ネクサスは言葉を続ける  
フェイルは再び俯く……………」

「……………父さんの言葉……………」

オレは嘘だと思っから……………」

お前と彼奴の糸は切れちゃいねえよ」

「……………っ……………でも」

「……………諦めんな……」

ネクサスはフェイルの頭に手を乗せる  
大きくて暖かい手……………」

安心仕切れるような……」

そんな そんな優しい手

ポロポロとフェイルは泣き出す

「ちょ……………泣くなつて……」

どう 慰めたらいいか分からなくて  
とにかく抱き締める 目一杯抱き締める

離したくはない 離さない  
離したら 消えそうで 無くなりそうで  
怖かったのもある…  
だから だから 誓いながら  
フェイルの肩に触れる

「ネクサス……………ネアス大丈夫かな」

「よく眠ってるし大丈夫だろ」

短い会話……………

後は目と目で会話

誰も言葉は発さない……………

沈黙だけが 付きまとう……………

「……………フェイル様…ネクサス様  
そしてネアス様……………運命の子……………  
今……………揃いつつありますわね」

「ああ……………我等も…そしてお前も」

「ずっと待ち望んだよねえ！」

「……………でも…今一つ……………  
星が……………消えようとしてる…  
気を付ける皆……………」

「当たり前ですよ……………」

今…彼等を見守れるのは僕達しか居ない

……きつと守りますよ……」

「では今日は……」

『解散だな』

声が消え 気配も消え去る……

コトリ………カップを置く音だけが

その場に響き渡る………

## 第5話 遙か彼方の神々

「お久しぶりですわ皆様…」

1人の少女の声が響き渡る

瞬間複数の気配が現れ

1つのテーブルを囲む

人数分のカップが置かれて

それぞれの好みだろう飲み物が注がれる

アップルティーやダーズリン

ジャスミンやレモンティー

中には煎茶や玄米茶を飲む者も居る

「茶菓子もありますわ…」

「ご自由にどうぞ」

そう伝えるのは

やはり先ほどの声の少女だ

赤く長い髪をふたつに結い

少し似合わないような大きい帽子

そして何より全ての神々と比べると

非常に子供のような容姿をしている

少女の名前はユウ…世界創始者だ

「さて……今日集まってもらったのは」

「フェイルの事…そして  
何も知らないだろうネクサスの事だ」

「イージス…我のセリフを  
取らないでほしい」

「ふむ…それは申し訳ない事をした」

苦笑するは邪なる異端の大天使

ファルガイア…金髪の青年だ

口を尖らせて謝るのは星の女神

イージス…口調は古風

2人はいつもこんな感じだ

「ところでファル………  
本題に入って構わないかな」

「あ………ああ…じゃあ頼む」

仕切り直しをしたのは

ファルガイアと同じ異端の大天使

司るのは聖の力…アレックス

人当たり良く誰にでも好かれ

愛し愛される理想的な天使だろう

「この度の本題は

フェイル君とネクサス君の事だ…

知っての通り彼等はまだ気付いてない」

「………まあ…拒絶も困るしねえ…

ならいつそ…もうちょっと  
待ってみようよ！…ねえっ？」

アレックスの言葉を聞いて  
提案してみるのは赤髪で

赤 紫のオッドアイ少年ティリアだ

ニコニコと笑いながら

ティリアが告げては

アレックスはうーんと考える

「僕等にはまだ時間もあるからね」

「そうそう堅くなっちゃダメだよお」

「ティリアは柔らかすぎだ」

「そこがティリアのいい所じゃないか」

「ファルガイア…主は甘い」

「ファルガイアは甘くないよおっ」

「そつだ我々が堅いんだ……」

1人くらい優しい者が居ても

悪くは無いだろう」

「いや…アレックスも充分

柔らかいと私は思うのだが……」

イージス ファルガイア ティリアが

ちよつとした言い争いをする  
よくある光景にアレックスや

ユウは笑みを浮かべる

ユウが1つミルクティーを啜り皆を見渡す

「では本題に移りますわ？」

当面は彼等を見守る事

レイヴイル様について調査と…

大魔王神様を見張る事…」

「そうだな…最近の大魔王神の

身勝手かつ自由過ぎる行動は

いささか目に余る…

私はお姉様等と大魔王神の

見張りを担当しよう…」

とユウが話し終えたあと

玄米茶を飲み干しては決定を待つ

アレックスとファルガイアは

2人手を取りユウに目を向ける

「僕とファルはレイヴイルの調査行くよ

僕達の能力は探索や調査に

長けているからね!!」

「じゃあさしずめ僕は

フェイルとネクサスを見守る事かな」

「では僕もティリア様と共に…

皆様のお手伝いにも参りますわね」



「じゃあ私はお姉様等に会いに行く」

「イージス…話は聞いた…  
何を勝手に決めておる…」

「我が輩等にもちつとは相談せい」

「レゼルお姉様に…ファスタお姉様」

最初に現れたのはファスタ  
溜め息付きながら呟き  
レゼルは少しだけ怒り口調で言う

「姉者珍しくイージスが決めたのだ  
時にはいいんじゃないか？」

「おやあ？ファスタ  
あんたも始めはイージス1人で  
決めたのに反感したわよねえ」

「う…姉者…  
それは今は関係無いかと」

「我が輩に刃向かうのかなあ  
この妹はあー」

「レゼルお姉様…  
ファスタお姉様が嫌がってる  
本当に…嫌がってる…」

3 姉妹の話の後

アレックスとファルガイアが  
首を突っ込む

「でもファスタにレゼル  
会うのは久しぶりだね……」

「我も君等とは  
もう少し話がしたいと思っていた」

「ファスタは忘れてるかもだけど  
我が輩はきちんと覚えてるから  
アレ君にファル君だったね」

「姉者……拙者も覚えている  
アレックス……ファルガイア久しぶりだ  
拙者も主等とは話したく思っていた」

ワイワイと4人は話しをしていく  
今までの事 黒の神の事 白の神の事  
神鳥や神龍……主に話になるのは  
ファスタやレゼルが旅をして  
見て来た人間界の話や旅の風景だ  
仕えてる神の話なんかも花が咲く

まあ4人は息の合う仲よし4人組なのだ

4人が会話している中

ユウ ティリア イージスは

今後の話もしていた……

大魔王神の処罰…そして対処…

他 集まらなかった神々の話も

いつ伺いに行くかなど……

7人の神々が 光の世界で集まる中

他7人の神々は 闇の世界で集まっていた

## 第6話 闇の神々は地の底で

「ユウが何かを考えて居るわ」

「殺される……………」

「闇の者なら小さな魔も  
大きな魔も殺される……………」

「我々も対策を練らねばならぬ」

「当たり前だ……………」

あのお方を守護するは僕さ」

「簡単に殺されてたまるか  
私は死ぬわけにはゆかぬ……………  
主の為にもな……………」

集まって居るのは

冥界の神 地獄の神

闇の神 黒の神 崩滅の神

そして悪神と邪神…

一応だが神々の名前と簡単な説明を書いておこうと思う

冥界の神……………スティラ…

頭が切れる闇の世界でも有数な神

残虐行為が好きで酷でもある  
闇の世界のリーダー的存在でもある

地獄の神……ヘレティア……

花をこよなく愛する地獄の神

黒の神と仲良しでもある

左目には十字架が埋め込まれてる

闇の神……ヴェギス……

闇の世界の影のような存在

よくスティラと居たりする

残忍無比と言われている

黒の神……シガレス……

力を扱えるようになった今は

心優しく弱きを助け強きを挫く子

黒の神にしてはちょっと泣き虫

崩滅神……ローヴィア……

感情が薄いがツンデレ+赤面性

気に入らないモノは消す

我が儘かつ子供らしいが憎めない

邪神……ヴォルト……

アルガルト家長男の邪神

邪魔導士である……感情は持ち合わせる

レイヴィルの守護者でもある

邪神だがシガレスと同じく優しい

悪神……ゼクス……

アルガルト家次男の悪神  
悪魔導士である…負の感情を持ち合わせ  
操作魔法と透視を駆使する  
非常に残忍無比な存在

「まあ…待ちなさい  
あたしはユウが無差別に  
闇の者を狩るとは思わないわ？  
ちなみに狩られるとしたら  
”こちら”でも目に余る大魔王神かしら」

「確かに大魔王神の行動は目に余る」

「ティアもそう思うわ」

ヘレティアやローヴィア  
ヴェギス等が口々に言い  
ステイラが言葉を紡ぐ

「ふん……………奴なら…  
自ら作り上げた息子等を今  
葬ろうとしている」

「な……………！？  
ネクサスとネアスをか！？」

ヴォルトが表情を変えてステイラに問う  
至って冷静にゼクスが先を読み告げる

「大魔王神は……………レイヴィルを残し

ネクサスとネアスを葬った後  
フェイルすら葬ろうとしている」

「待つて……ネクサス……フェイル  
そしてネアスにレイヴィル  
あの4人が消えては……大魔王神も」

シガレスが立ち上がり  
強い口調で告げて  
沈黙が訪れる

「仕方ないわ……………  
今はすべき事を決めましょう」

ローヴィアが先手を切り告げて  
一同は小さく頷く

「まあ……私の主が闇の者にも関わらず  
あれだけ……いや異常なまでに  
ユウの事を信頼しているからな……  
ローヴィアの言うとおり  
大丈夫だとは思っただがな」

「むしろ大魔王神には  
少し反省が必要……だと僕は思っね」

ゼクスとヴォルト立て続けに言い  
シガレスもまたヴォルトと並び  
スティラを見上げる

「そうさ…大魔王神の悪口じゃないけど  
彼はやりすぎた…頭を冷やさせるべき」

「まあ彼奴には残念だけど

一時的に封じられるべきだね…

我々にも決断しなければならぬ時もある  
例え…かつての仲間であろうともな」

ステイラが小さく告げて

シガレスが頷き見やる

それからヴェギスが全員を見渡す

「では…大魔王神の封印…」

始まりへの報告…これでいいな？」

「待つて？ユウに報告って

誰が行くの？ティアが行くの？？」

ヘレティアがキョトンとして聞く

それから言葉を続ける

「もしユウがティア達全員を

消し去るつもりしていたらどうするの？」

「その時…ユウには悪いが

我々も簡単に死ぬわけには行かぬ  
奴を抹殺あるのみだ…」

「ステイラ…一ついいかしら？」



ローヴィアがスティラの発言に  
冷たい視線を送る

「あたし達のような神々を  
全員生み出し…尚且つ

あたし達を含む神々全員の力を持つ  
あのユウにあんたが勝てるとは…

あたし思わないわね……  
だいたい…ユウがそんな事

するだなんてあたしは思わないわ…  
報告ならあたしが行くわ………」

報告に向かうのを

ローヴィアは自分から買って出る

でもローヴィアのは正論だった

世界の創造主は3人居る

そのうちの1人…唯一

地上全ての力を持ち 神々を生み出した

そう……言わば世界そのもの

そして創造主3人の中で

最も守りの力に長けているのだ

鉄壁守護のユウ これが

彼女の異名の一つなのだ

「とりあえずローヴィアが行くんだね」

シガレスがキョトンとして

ローヴィアに聞く 小さく頷き

辺りを見渡してニヤリと笑み浮かべ  
ローヴィアは言う

「ついでにもう一人来てほしいわね」

「……………じゃあ…僕が行くよ」

その一言に返事をしたのはヴォルト  
紫の髪を靡かせて

ローヴィアの隣に行く

「決まりだな…ではローヴィア  
そしてヴォルト…頼んだぞ…」

「ユウの返事を待っている…  
手短に済ませろ……………以上…解散」

ヴェギス スティラと続けて

ローヴィアとヴォルトに声を掛ける

ゼクスもシガレスもヘレティアも

話を聞き終えては闇に溶ける

場面は……………フェイルへと戻る…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8817x/>

---

-永久物語-

2011年11月24日23時50分発行